

プーシキン美術館展 ー旅するフランス風景画

東京都美術館（上野公園） 2018.04.14～07.08

「プーシキン美術館」は、収蔵品「約10万点」を誇るモスクワにあるヨーロッパ最大の美術館で、13世紀から現代までの各派の西洋絵画、特にフランスを中心とした印象派・ポスト印象派のコレクションは世界的に知られている。

本展は、この印象派・ポスト印象派名作が誕生した19世紀後半を中心に、17世紀～20世紀初頭までの「風景画65点」をずらりと展観する企画である。

展覧会では、かつては神話や聖書の一場面背景として描かれていた風景が、時を経てそれ自体が主題となっていく様子が一望できるもので、19世紀初頭には古典主義的な絵画に抵抗するように、“自然をより純粹に描こうとする「バルビゾン派」の画家たちが台頭してきた時代”である。

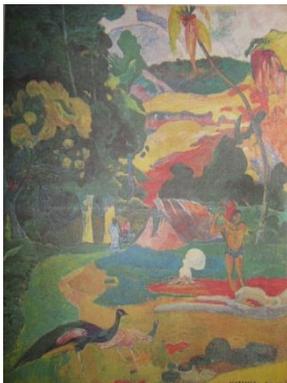
クロード・モネ 《草上の昼食（作品の左部分）》 1866年 油彩・カンヴァス



マネの《草上の昼食》に刺激を受けて、20代半ばの制作品で、森の中の明るい日差しを浴びながら食事を始めようとする、優雅な身なりの男女の姿が描かれた生氣ある画面は、縦4.5m、横6mもある巨大なものである。

本作は、「習作」（完成作に取り掛かる前に練習で描く作品）で、「ラファエロ」や「ティツィアーノ」を彷彿とさせる神話的（古典的）な主題を素地に、裸の女性と現代の服を着た男性がピクニックを楽しむ光景を描くことで「現代性」を表現しようとしたものとされている。

ゴーガン 《マタモエ：孔雀のいる風景》 1892年 油彩・カンヴァス



左手には高い木々の茂み、右手は開けてはるかな山なみ、その空間にはヤシの木が微妙な曲線を描き、中景には小さく女性の姿が見えて木と山と孔雀が人間たちの生活を包んでいる、装飾的な効果に満ちた晴れやかな作品である。

この円環状の構図は、左下から中景へと向かう道や、前景を右へ向かう孔雀たちの動き、男から女たちに向かう動きなどによって繰り返され、右下角の花や草は、左中央部の梢や男の背後の茂みとこたえあっている。

本展のそれぞれのテーマの代表的な作者は、「さあ、風景画の旅へ」：コロ、ロラン、ロベール、ドラン。「森へ、山へ、海へ」：セザンヌ。「もっと遠くへ」：ルソー、ゴーガン。「華やかなりしパリ」：ルノアール、ラファエリ。「木漏れ日のきらめき」：モネ、マティスらの巨匠たちの作品で構成されている。